

平成 30 年度 佐紀部事務所ほか整備工事に伴う立会調査

はじめに

事務所の移転・新築を主目的とする佐紀部事務所の工事に関しては、その経緯、平成 26 年度に実施した移転予定地の事前調査、平成 29 年度中に実施した工事に関する立会調査について、既に本誌において報告してきたところである。本号では、前号では掲載を見合わせた、契約変更による工期延長のため平成 30 年度へと実施時期がずれこんだ工事に対する立会調査について報告する。また、本項で撤去工事に関する調査報告をする旧事務所と浄化槽が改築・設置された、昭和 46 年度の工事の際に行われた調査について、その概要を紹介する。

1 平成 30 年度工事に伴う調査報告

皇后日葉酢媛命狭木之寺間陵附属地

電柱・支線設置箇所（第 62 図、図版 37-1） 新事務所へと電気を引き込むために、敷地西側の公道に面した斜面へ電柱とその支線を設置する工事が平成 30 年 4 月 4 日におこなわれ、監区職員が掘削に立ち会った。掘削の規模は、電柱設置箇所が径約 0.5 m、深さ約 3.0 m、支線設置箇所が径約 0.5 m、深さ約 1.4 m であった。掘削箇所が狭小であったため、両箇所とも上部の土層が平成 29 年度実施の管路等掘削工事の立会調査の際に確認された盛土であったことを確認したにとどまる⁽¹⁾。当箇所における遺物の出土はなかった。

新事務所前舗装箇所（第 62 図、図版 37-2） 敷地南側の公道と事務所建物との間のスペースを自動車が通行・駐車できるようにするための舗装工事に伴う掘削が平成 30 年 6 月 8・12・13 日に行われ、監区職員が立ち会うとともに、14・15 日には記録化作業をおこなった。掘削の規模は、面積約 86㎡、深さ約 0.5～0.7 m であった。この箇所では、平成 26 年度実施の事前調査時⁽²⁾、29 年度実施の新事務所基礎掘削立会時⁽³⁾の所見と変わらず、表土層、旧耕作土層、地山層が確認された。当箇所における遺物の出土はなかった。

皇后日葉酢媛命狭木之寺間陵本地

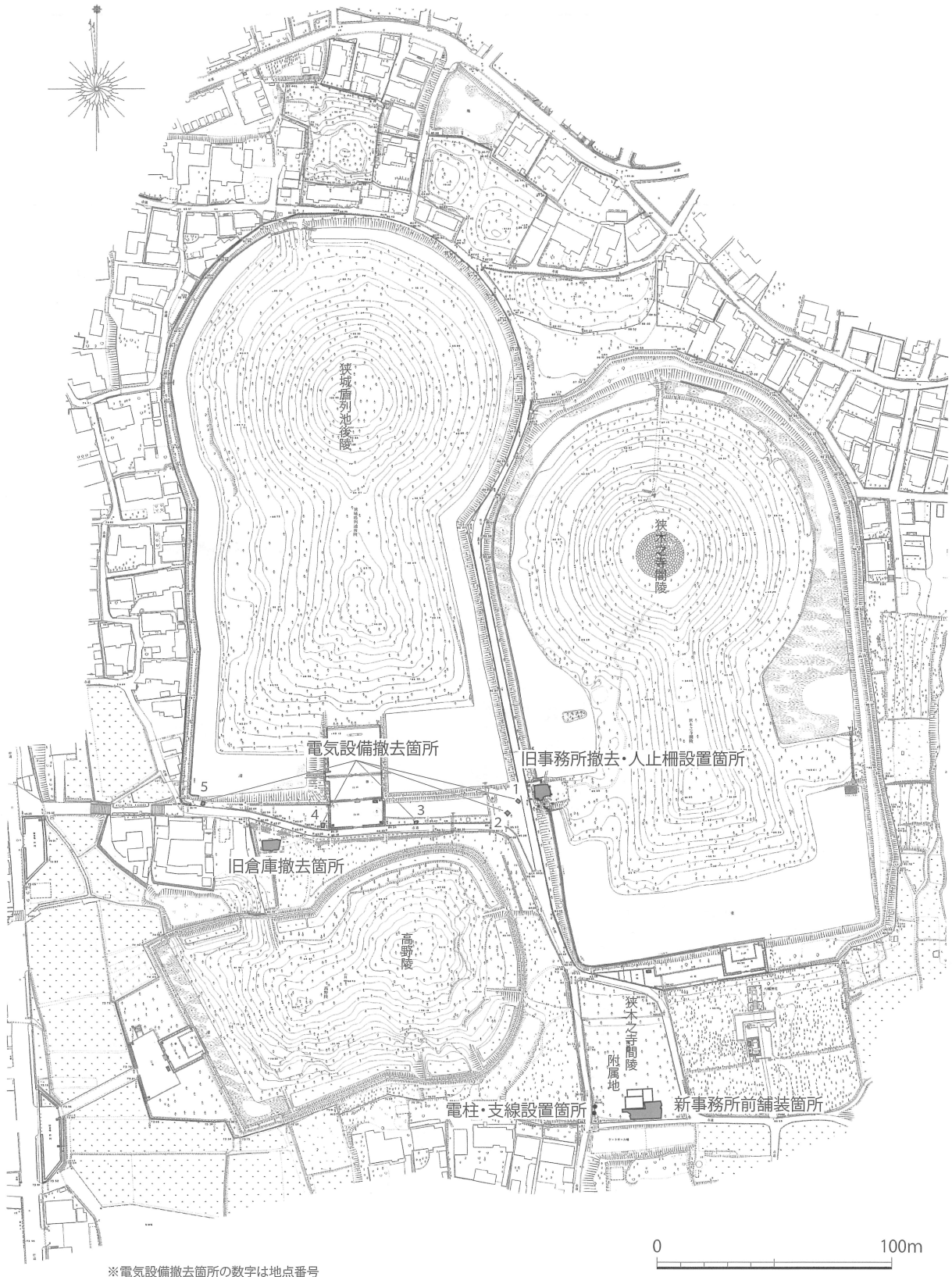
旧事務所撤去箇所（第 62～64 図、図版 37-3～8、38-1～4） 7 月 23 日から狭木之寺間陵西側渡土堤上にあつた旧事務所及びそれに付随する浄化槽の撤去工事が始まり、陵墓調査室員と監区職員が、7 月 23 日から 28 日までの間、掘削の立会いと記録作業に従事した。また、期間中の 26 日には、歴史学・考古学関係 16 学・協会の代表者に対し、工事箇所の公開をおこなった。

この箇所付近における調査事例としては、後述する、昭和 46 年度に実施されたもののほか、平成 2 年度に実施した、墳塋護岸をメインとする整備工事に伴う事前調査がある⁽⁴⁾。

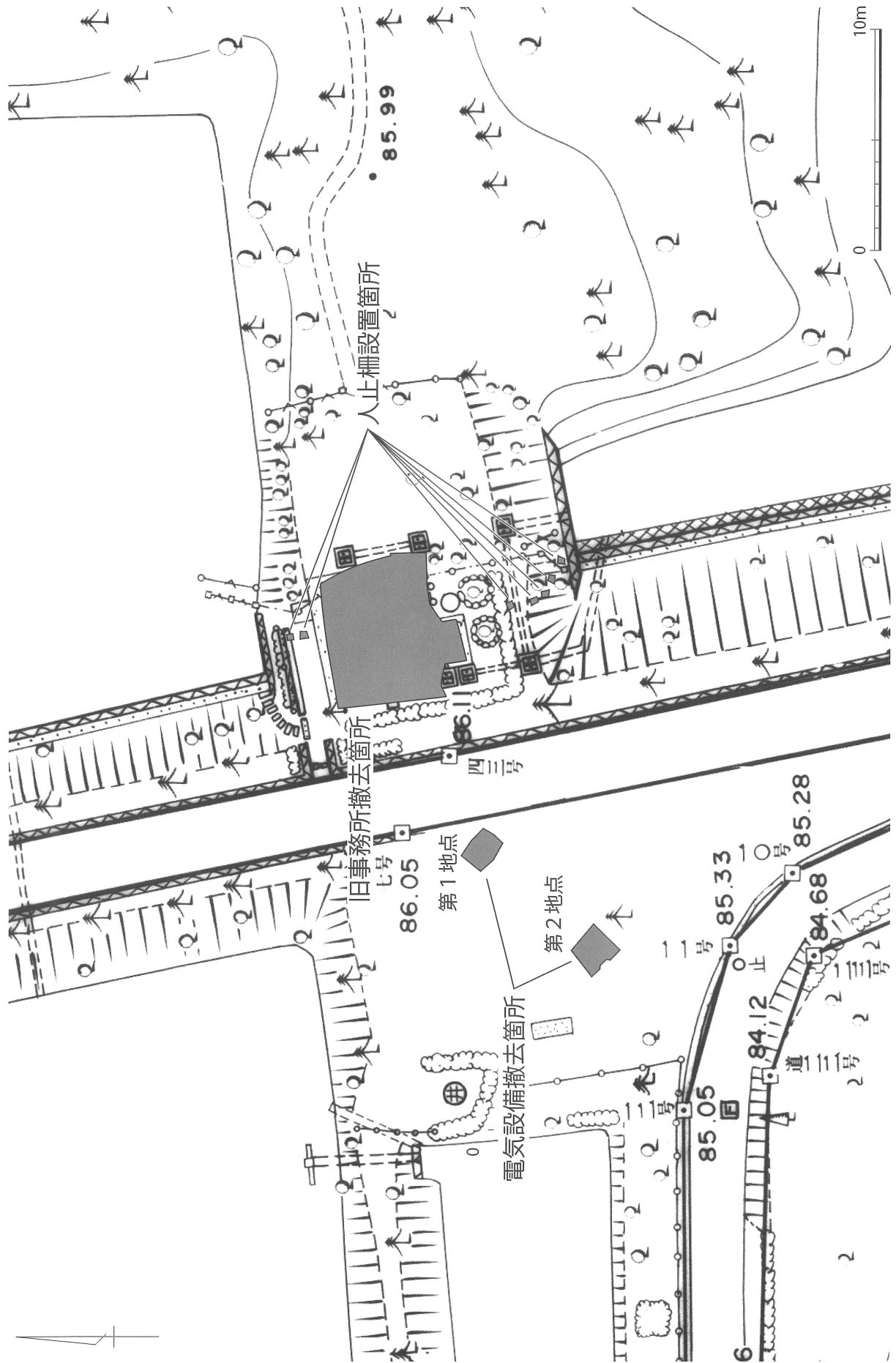
掘削の規模は、旧事務所撤去箇所が、長さ約 6.0 m、幅約 5.5 m、深さ 0.5～1.3 m で、浄化槽撤去箇所が、長さ約 2.0 m、幅約 1.0 m、深さ 1.2～1.3 m であった。この箇所では、表土層（Ⅰ層）、旧事務所・浄化槽設置に伴う掘削箇所やその際に実施された調査箇所の埋め戻し土（Ⅱ層）、渡土堤本体には伴わない後世の盛土や堆積層（Ⅲ層）、渡土手に伴うものとみられる盛土層（Ⅳ層）、地山層（Ⅴ層）が確認された。Ⅳ層とした土層については、現場公開時に、盛土ではなく地山と評価すべきではないのかとのご意見をいただいたが、黄褐色土の粘質土層中に灰白色の粘質土がブロック状に混入していると観察されたことから、ここでは盛土層と判断した。土層の状況からは、当陵の西側渡土堤本体は地山の凹凸部分を盛土によって補って築造されていると思われる。

なお、掘削箇所西側の底面において杭列と思われる小ピットの列を検出した。ピット内が粗砂で埋められていたことから、後述する旧事務所への改築工事の際に実施された調査において確認されていたものと同じものと思われる。

当箇所から出土した遺物の総点数は 176 点である。すべて埴輪片で、明らかな後世の遺物は含まれていない。器種が判明するものとして、盾形埴輪の破片が目につく。これらの埴輪については、後日、稿を改めて紹介

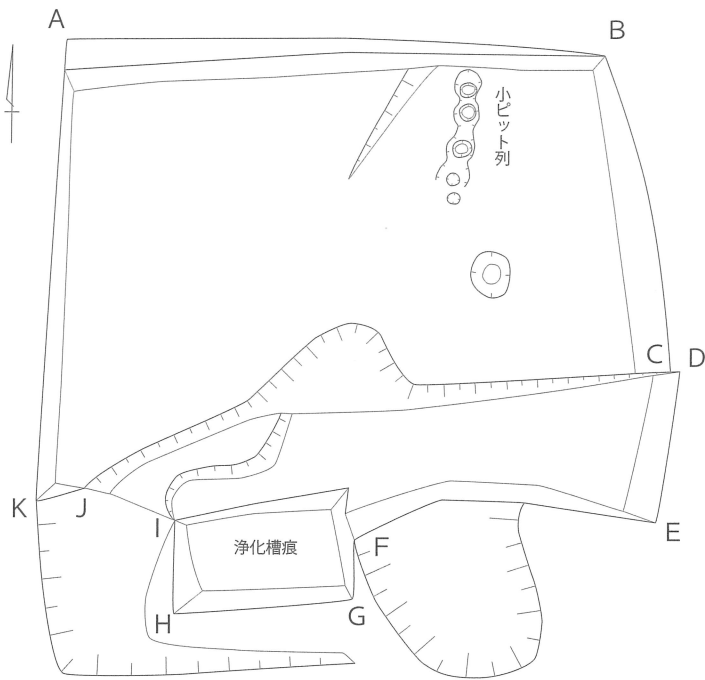


第 62 図 佐紀部事務所 掘削箇所位置図 (1/2500)

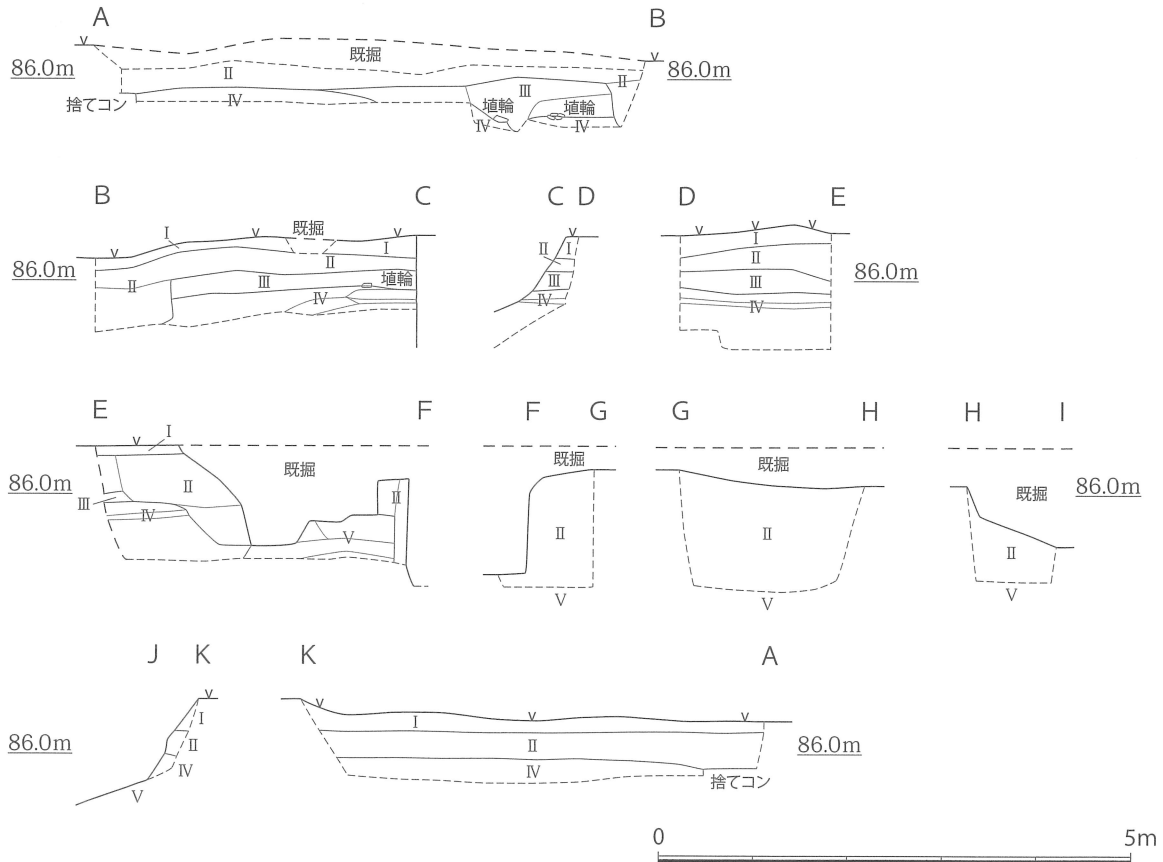


第 63 図 佐紀部事務所 掘削箇所位置拡大図 (1) (1/250)

平面図



断面図



第 64 図 佐紀部事務所 旧事務所撤去箇所 平面図および断面図 (1/80)

したい。このほかに、結晶片岩片 1、安山岩片 2 を回収している。

人止め柵設置箇所（第 62・63 図） 旧事務所が撤去され、埋め戻されたのち、渡土堤上に人止め柵を設置する工事がおこなわれた。基礎の掘削が 8 月 23・24 日に実施され、監区職員が立ち会った。旧事務所跡地に重複しない新規掘削箇所は 7 箇所、いずれも、約 0.4 m 四方、深さ 0.6 m であった。掘削箇所が狭小であったため上部が表土層であることしか確認できなかったが、掘削箇所において葺石は検出されていない。当箇所における遺物の出土はなかった。

成務天皇狭城盾列池後陵本地

電気設備撤去箇所（第 62・63・65・66 図、図版 38-5～8、39-1・2） 8 月 21～23・31 日に、狭城盾列池後陵外堤南西隅付近に設置されていた電気線引き込み柱とそこから旧事務所へ向けて地下に埋設されていた電気線を撤去するための工事がおこなわれ、現地の監区職員が対応した。本掘削箇所近くでおこなわれた調査としては、平成 4 年度におこなわれた、狭木之寺間陵整備工事に伴うものがある⁽⁵⁾。

掘削箇所は、5 箇所、旧事務所の道路を挟んだ西側で当陵周濠南東隅付近外方にあたる駐車スペースとして利用していた平地内にて 2 箇所（第 1・第 2 地点）、当陵拝所東側にて 1 箇所（第 3 地点）、同西側にて 1 箇所（第 4 地点）、上記電気線引き込み柱が所在した周濠南西隅付近にて 1 箇所（第 5 地点）であった。各地点の掘削規模は、第 1 地点が長さ約 1.7 m、幅約 1.0 m、深さ約 0.5 m、第 2 地点が長さ約 1.7 m、幅約 1.2 m、深さ約 0.6 m、第 3 地点が長さ約 1.5 m、幅約 1.2 m、深さ約 0.6 m、第 4 地点が長さ約 2.0 m、幅約 1.6 m、深さ約 0.7 m、第 5 地点が長さ約 1.6 m、幅約 1.5 m、深さ約 0.9～1.1 m の規模であった。なお、電気線は埋設された管の中に引かれていたが、掘削箇所において管の位置を確認してそこから電気線を引き抜くという工法を採っており、埋設管すべてを撤去したものではない。

各掘削箇所を確認されたのは、表土層（Ⅰ層）、今回撤去した電気設備や人止め柵など陵墓管理上の工作物の設置及び隣接道路の整備等、現代の工事に伴って形成された土層（Ⅱ層）、陵そのものには伴わないが近世以前に人為的に形成された土層（Ⅲ層）、地山層（Ⅳ層）である。うち、第 5 地点ではⅢ層中に埴輪の小片が含まれていることを確認した。第 5 地点は周濠の外周を巡る小土堤にかかっており、その小土堤を構成する盛土が埴輪片を包含していることになる。これらの埴輪片は、当陵に伴うものである可能性が最も高いが、「幕末の修陵」時における小土堤築造に際して外部から土が持ち込まれている可能性もあるので、注意を要する⁽⁶⁾。

第 5 地点出土埴輪の総点数は 19 点である。いずれの埴輪も野焼き焼成で、突帯の形状から、古墳時代前期の所産と見られる。いずれも小片であるが、口縁部や突帯の形状がわかるもの、何らかの形象埴輪の破片と思われるものも含まれる。

称徳天皇高野陵

旧倉庫撤去箇所（第 62・65・67 図、図版 39-3～8） 狭城盾列池後陵の前面を走る道路の南側、称徳天皇高野陵敷地北側に所在した旧倉庫の撤去に伴う掘削が 7 月 27 日におこなわれ、陵墓調査室員と監区職員が掘削の立会い、28 日に記録化をおこなった。掘削の規模は、長さ約 7.5 m、幅約 4.0 m、深さ約 0.1～0.5 m で、確認された土層は、表土層（Ⅰ層）、旧倉庫の基礎掘り方の埋め戻し土層（Ⅱ層）、地山層（Ⅲ層）であった。当箇所における遺物の出土はなかった。

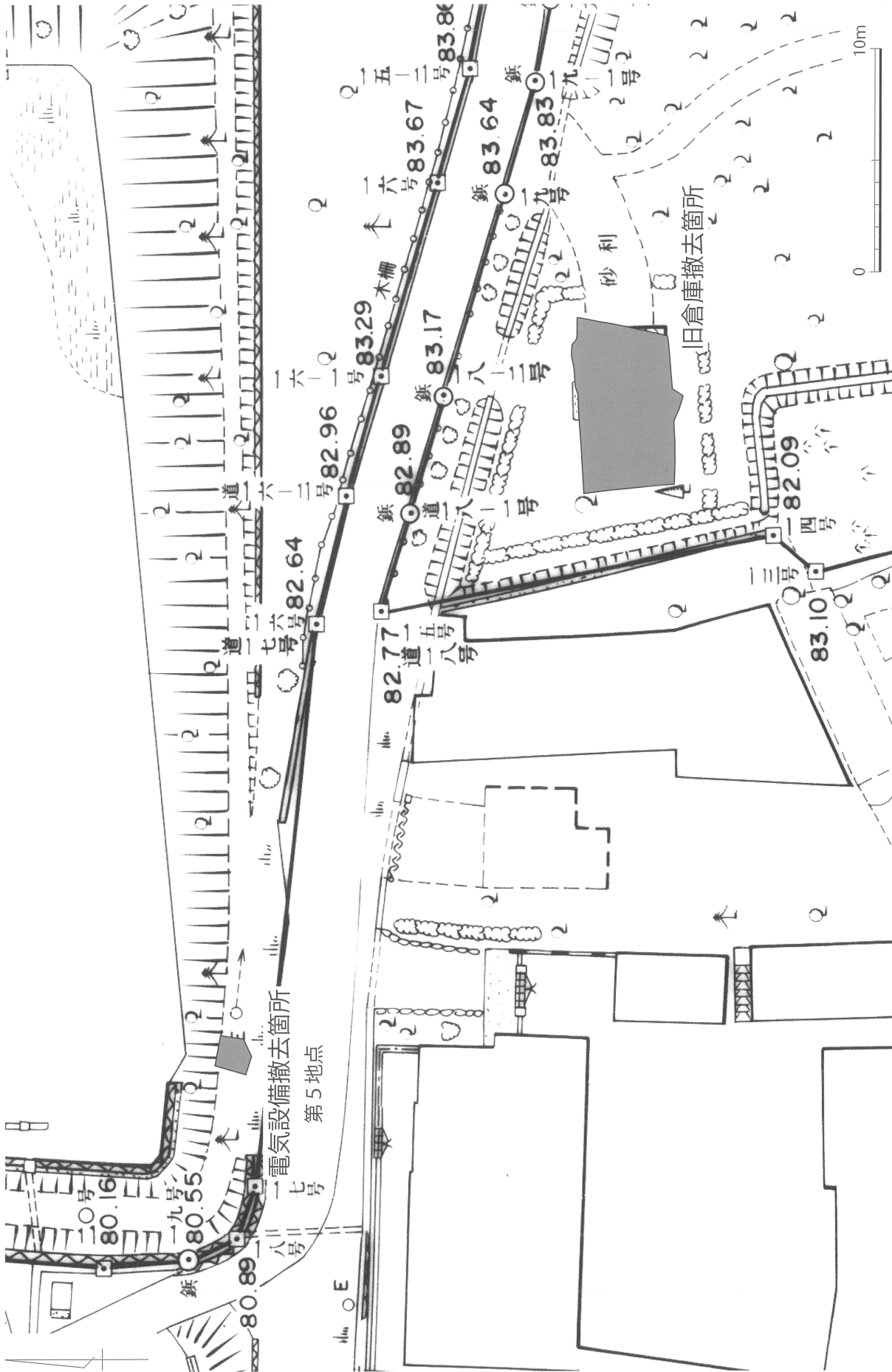
小結

工法変更による工期の延長はあったものの、各掘削箇所において保存すべき遺構は確認されなかったため、工事は施工された。

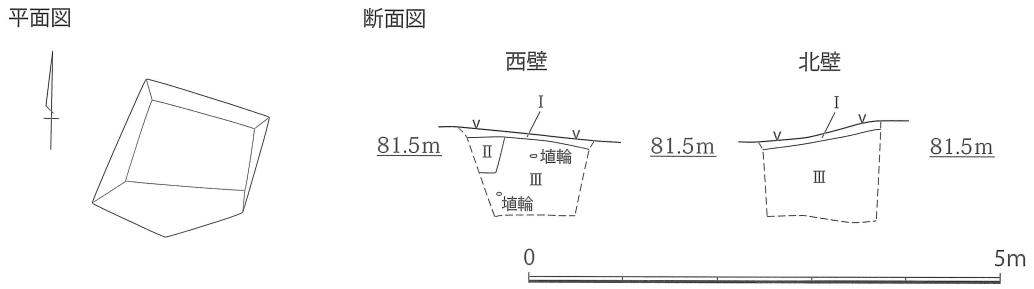
平成 26 年度に実施した新事務所移転予定地における事前調査から足かけ 5 年を要した佐紀部事務所の移転・新築に関わる工事・調査は、これですべて終了した。

2 昭和 46 年度「垂仁天皇皇后陵見張所改築工事」とそれに伴う調査

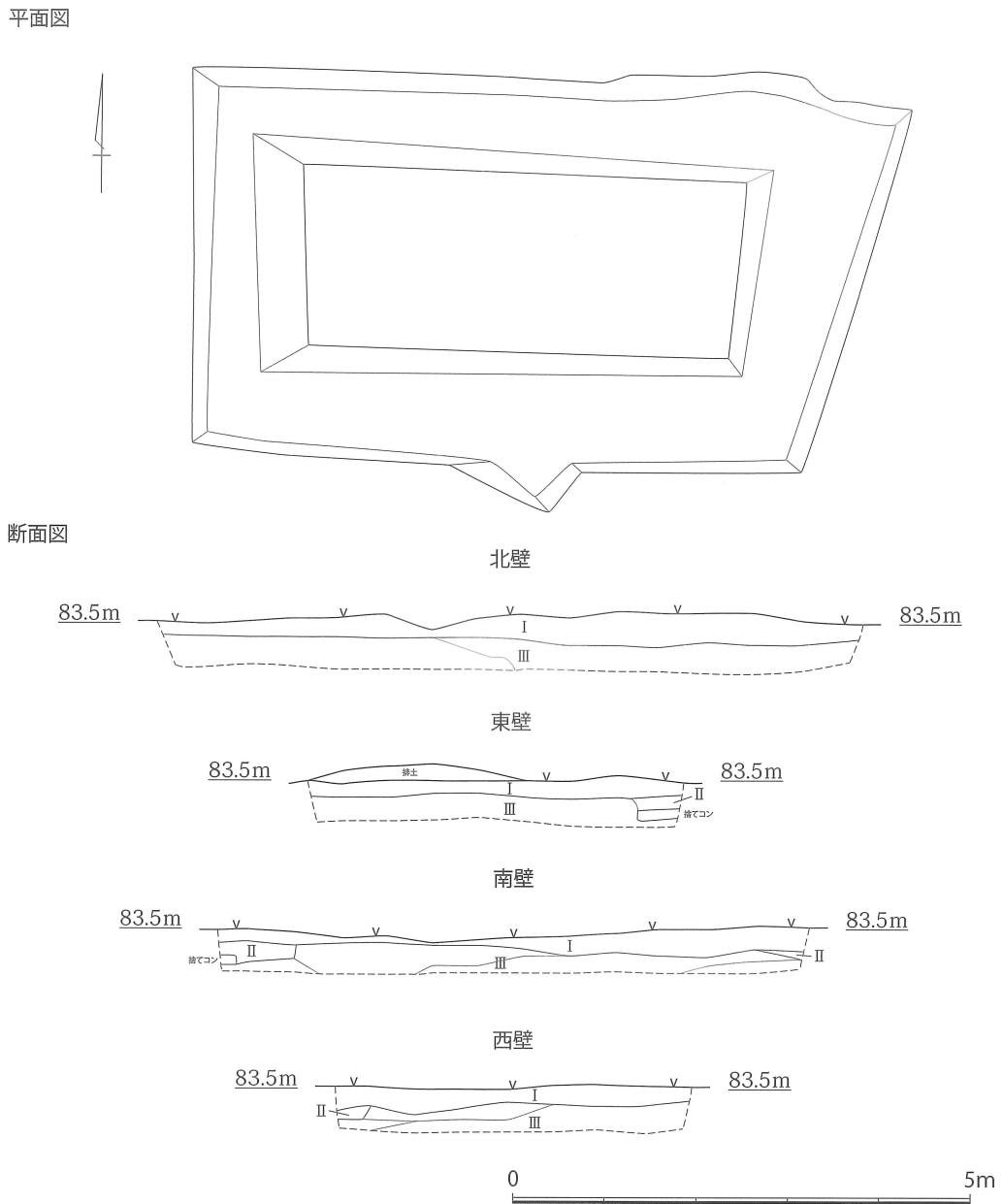
旧佐紀部事務所は狭木之寺間陵の西側渡土堤上に所在していたが、その旧事務所が建設された工事が「垂



第65図 佐紀部事務所 掘削箇所位置拡大図(2) (1/250)



第 66 図 佐紀部事務所 電気設備撤去箇所 第 5 地点 平面図および断面図 (1/80)



第 67 図 佐紀部事務所 旧倉庫撤去箇所 平面図および断面図 (1/80)

仁天皇皇后陵見張所改築工事」である。工期は、昭和46年11月13日から翌47年3月11日であった⁽⁷⁾。この工事の際、埴輪が出土して緊急的な調査が実施されているので、その概要を紹介する。

なお、この工事及び調査で出土した埴輪のうち、優品については平成15年度書陵部所蔵出土品展示会『埴輪Ⅳ』において公開している。同展の展示目録において出土年次が「昭和46」となっているものが該当するので、参照願いたい⁽⁸⁾。

工事の概要

旧事務所以前から、当陵の見張所は西側渡土堤上に所在していた⁽⁹⁾。この場所からは、狭城盾列池後陵の拝所と狭木之寺間陵の拝所の両方を見通すことが出来るため、見張所に最適な立地として選ばれた可能性が高い。旧事務所から見て先代にあたる見張所の建物構造は、木造であったようである。木造の見張所は現在でも各地の陵墓に現存しているが、水道、電気、トイレがないため、先代見張所にもそれらは無かったものと思われる。この改築により、建屋は鉄筋コンクリート造りとなり、水道・電気が引き込まれ、トイレが設置されることとなった⁽¹⁰⁾。また、トイレ、流し、物置が併設されたことから。床面積もひとまわり大きくなっている⁽¹¹⁾。こうして、勤務する監区職員にとっては大幅に環境が改善されることになったが、その反面、建物の基礎やトイレに付随する浄化槽を設置する場所を、ある程度の深度まで掘削する必要が生じることになった。埴輪等の遺物が出土することとなったのはこうした理由による。

改築工事に際しては、先代見張所を撤去・整地ののち、旧事務所の基礎設置のための掘削がおこなわれた。当初予定の掘削規模は、東西5.5m、南北4mの範囲の外周に沿って、西・南・北辺では幅1m、物置やトイレが設置される東辺では幅2mで、深さ0.5m程度であったと想定される。また、旧事務所基礎が設置されたあと、南側の隣接地に浄化槽設置のため、長さ1.8m、幅1m、深さ1.8m程度の掘削が予定されていた。

遺物出土と調査の経緯

基礎を設置するための掘削を進めたところ、南辺と東辺の角付近で立った状態とおぼしき埴輪が確認された。昭和46年12月22日のことである。そこに至るまでの掘削においても埴輪片が出土していたようであるが、掘削を停止させるほどのものではなかったようである。工事に立ち会っていた監区職員は、上記埴輪の出土を受けて工事請負業者による掘削を停止させ、メモ取りや撮影などをおこなった。一方、掘削作業ができなくなった請負業者は既掘分の排土の搬出作業をおこなったため、回収仕切れていなかった埴輪片が混入したままの排土が持ち出されることとなった。

この回収仕切れていなかった埴輪が、残土処分場で一般市民によって採集され、奈良国立文化財研究所(現・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所。以下、「奈文研」と総称)へと持ち込まれた。排土の搬出元が宮内庁の工事現場であることを突き止めた奈文研は、坪井清足氏が陵墓課へ連絡を入れ、これを受けた陵墓課では奈良県教育委員会に調査を委託することとし、同教育委員会の小島氏(おそらく小島俊次氏)の承諾を得た。これに対し、現地を訪れた坪井氏が奈文研による調査を提案、陵墓課と小島氏がそれを受け入れたことから、奈文研による調査がおこなわれることになった。

なお、12月23日には、現地の状況の確認と対奈文研の折衝を目的とした出張命令が陵墓課の石田茂輔氏に出されており、同氏は、24～27日の日程で現地及び奈文研を訪れている。

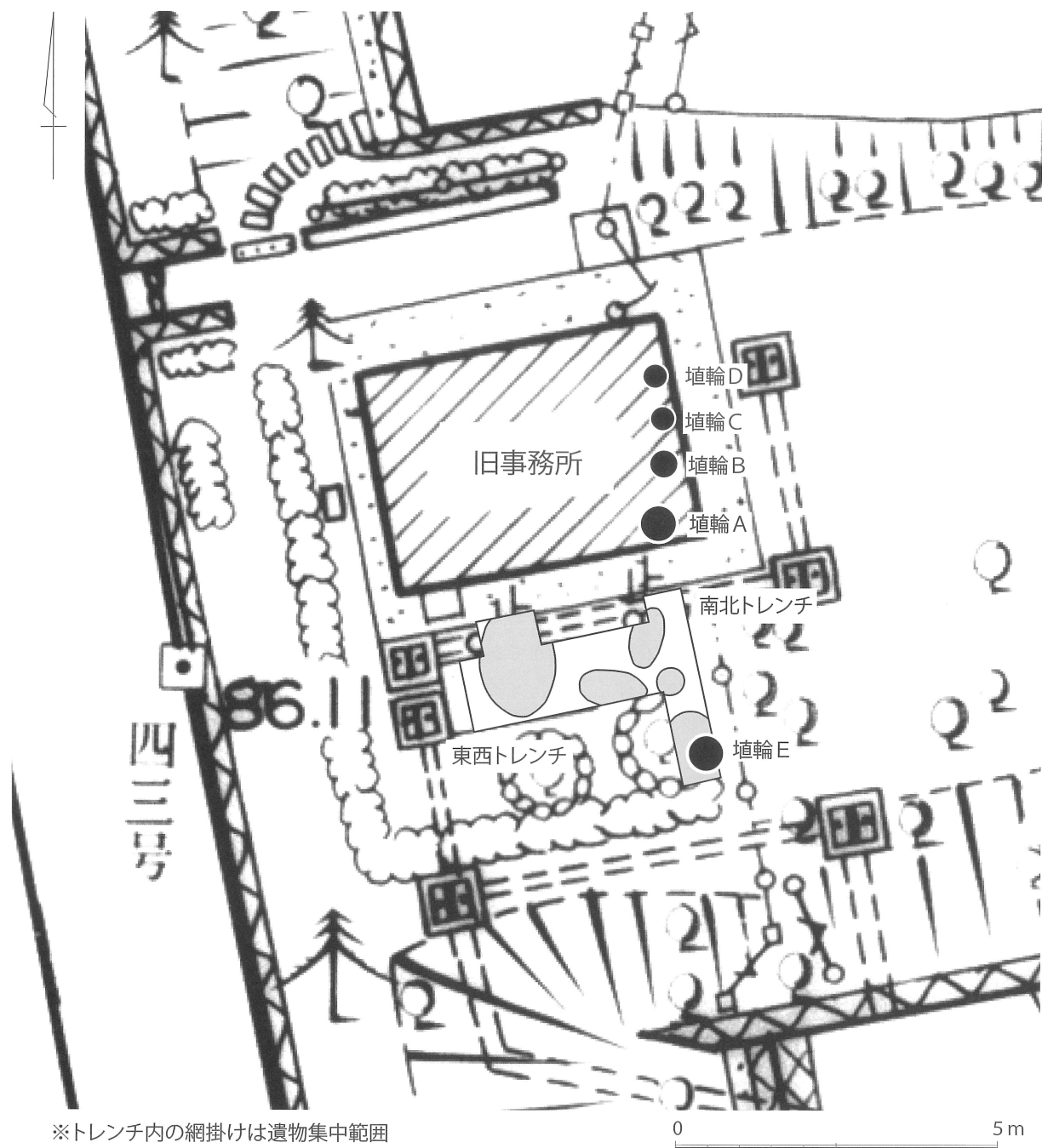
奈文研の調査終了後、続いて掘削がおこなわれる予定であった浄化槽設置予定箇所において、監区職員によるトレンチ調査がおこなわれている。調査期間は昭和47年1月18日から21日の4日間であった。

立ったままとされる埴輪が確認されてから、奈文研による調査決定を経て陵墓課・石田氏の出張命令まで一日しか経っていない。当時の状況はかなり慌ただしいものであったに違いない。

調査の内容

上記の内容を整理してみると、旧事務所改築工事に伴う調査は、不時発見を受けての監区職員による記録作業(以下、「基礎箇所調査」、奈文研による調査(以下、「奈文研調査」)⁽¹²⁾、監区職員による浄化槽設置予定箇所での調査(以下、「浄化槽箇所調査」)の、3回にわたっておこなわれたことがわかる。

基礎箇所調査(第68図、図版40-1・2) 東辺付近で出土した埴輪の位置関係とその埋没状態をメモシ



第68図 佐紀部事務所 基礎箇所調査 埴輪位置
および 浄化槽箇所調査 トレンチ・埴輪位置 想定復元図 (1/100)

た図が残されている。それにより、調査の契機となった、立ったままのような埴輪（埴輪 A）と、そこから北へ向けて 3 個体、計 4 個体分の埴輪が並んでいるような状況であったことがわかる（埴輪 B～D）。埴輪 A の直径は 49.6cm で、その底面は、当時の地表面からの深さ 81cm であったという。埴輪 B～D は、直径 30cm 内外の範囲に破片が不定形に乱立していたとのことで、A とは異なる状態であったことが示唆されている。各埴輪の間隔は、A-B 間が 45cm、B-C 間が 32cm、C-D 間が 41cm とのことである。出土状況がわかる写真は A のものしかないが、取り上げ後の写真により、この個体が『埴輪Ⅳ』の目録番号 25 であることを識別できる。

奈文研調査（第 69 図、図版 40-3・4） 調査日程は不明であるが、奈文研で保管される調査図面の書き込みから、遅くとも 12 月 25 日には着手されていたことがわかり、同じく調査写真に昭和 47 年 1 月 10 日撮影となっているものがあるで、このころまでは続けられていたようである。奈文研では、狭木之寺間陵を「4PHB」と呼称しており、この調査は「次数外 74-13 次」とされている。なお、図面の作成者名として、「高島」、「甲斐」、「稲田」、「岡本」、「吉田」の記載があり、それぞれ、高島忠平氏、甲斐忠彦氏、稲田氏孝司氏、岡本東三氏、吉田恵二氏のことと思われる。

奈文研調査では、建物の東辺の基礎箇所を精査と、東辺のライン上を長さ 2m、幅 2m ほど南へ延長した拡張区の掘削、南辺の壁面に沿った断ち割りなどがおこなわれている。図面を見る限り、基礎箇所調査で記録された列状の埴輪はすべて取り上げられていたと思われる。東辺基礎箇所底面の精査によって、埴輪 A と B の痕跡らしき円形の凹みを確認しているほか、南北方向の溝状遺構とその中に並ぶ小ピットを検出している。各ピットの直径は 15cm 内外で、一部間隔が開いているところや接続しているものもあるが、11 個ほどが確認されている。また、南方への拡張区において、礫の集中する箇所が確認されている。

浄化槽設置箇所調査（第 68 図、図版 40-5・6） この調査では、T 字形に接続する、東西方向、南北方向の 2 本のトレンチが設定されている。東西トレンチはおおよそ長さ 3m、幅 1m、南北トレンチはおおよそ長さ 3m、幅 0.6m で、遺物が集中していた箇所では、適宜拡張していたようである。東西トレンチの西半部が浄化槽の設置予定箇所にあたる。

ここでは、複数の遺物集中箇所が確認されている。東西トレンチの西寄り、白色円礫の集積箇所が見つかっているが、記載される深度からすると表土層中のものと思われ、後世に集められたものと思われる。また、南北トレンチの南端で、立ったままのように見える埴輪が 1 個体確認されている（埴輪 E）。埴輪 E の直径はおおよそ 52cm、底面は周囲の地表面から 1m ほどの深さだったらしい。埴輪 E の平面的な位置は、埴輪 A～D のラインの延長線上に近く、埴輪 A からは 3m ほど離れた場所に相当する。これ以外の遺物集中箇所は、原位置を保っているとは判断されないような状況であったと見られる。

土層について

現在でも有効と考えられる土層断面図が作成されているのは奈文研調査のみである。これと浄化槽箇所調査での記録とをまとめると、旧事務所基礎の南辺より南側では、当時の地表面下 60cm で地山層が確認されているが、基礎南辺よりも北側や東側には続かず急激に落ち込んでいることになる。また、地山の上には、濠からの浚渫土や埴輪片を含んでいる土層が確認されている。

このような所見は、平成 30 年度調査の結果とおおむね一致しているといえよう。

検出遺構について

小ピット列 奈文研調査で、溝状遺構の中に並ぶ小ピットが検出されている。平成 30 年度の調査でも同様のものを検出しているが、その位置と埋め戻し状況からみて、昭和 46 年度の奈文研調査で検出されているものを再検出したものと判断される。奈文研調査による図面からは新しいものと認識していたことが伺えるが、旧陵墓地形図をみると、先代見張所の東側に南北方向の柵が記載されていることを確認できるので、溝状遺構と小ピット列は、そういった柵の痕跡と思われる。

埴輪 埴輪の出土状況は、立ったままのような状態で検出された 2 個体（埴輪 A・E）と、それらとは異なるにせよ並んでいる可能性のある 3 個体（B～C）、面的・層位的に散在している状態であったもの、集

中して出土しているものに分けられるようである。

面的・層位的に散在している状態のものは、後世の盛土の中に埴輪片が含まれていた結果と思われる。集中して出土しているものについては、集中する場所では浅いところから深いところまで折り重なっていたとされることから、集めた埴輪を何らかの機会に埋めたものと想定される。

埴輪 A～E については、かつて、「一個の基底部を構成する破片の中に隣接した他基底部片と接合するものがあったといわれ、大正五年に後円部墳頂から出土した埴輪片をここに埋めたのではないかと疑われている」と評価されたことがある⁽¹³⁾。しかし、後から出土した埴輪 E を除き、奈文研が調査に乗り出した時点ですでに取り上げられていたと思われるため、上記のような情報を得られたのか疑問である。少なくとも、現品を見る限りにおいては、出土場所毎に取り上げて、それらが混交しないように注記をしている、といった整理はなされていない。埴輪 A・E に関しては、原位置をとどめていた可能性が高いものと考えておきたい。

まとめ

狭木之寺間陵に関しては、今回、昭和 46 年度と平成 30 年度の、およそ 37 年の時を隔てて同じ場所でおこなわれた掘削に伴う調査について、報告・紹介をおこなった。各掘削箇所的位置関係については正確には分からなかったため、推定復元図を作成してみた（第 70 図）。昭和 46 年度の調査では豊富な遺物が出土しているが、当庁において十分な考古学的調査を実施する体制が確立していなかった時期であったことは、巡り合わせが悪かったというほかない。平成 30 年度および昭和 46 年度の出土品については、機会を改めて紹介する。

佐紀盾列池後陵では、外堤の小土堤から埴輪が出土した。遺構に伴うものではないが、今後、近辺で掘削に伴う工事がおこなわれる際には、注意したい。（有馬 伸）

註

- (1) 有馬 伸「垂仁天皇皇后日葉酢媛命 狭木之寺間陵佐紀部事務所ほか整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第 70 号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2019 年。
- (2) 有馬 伸「佐紀部事務所建替予定箇所における事前調査」『書陵部紀要』第 67 号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2016 年。
- (3) 註（1）に同じ。
- (4) 福尾正彦・徳田誠志「狭木之寺間陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第 43 号、宮内庁書陵部、1992 年。
- (5) 徳田誠志・福尾正彦「狭木之寺間陵整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第 44 号、宮内庁書陵部、1993 年。
- (6) 鶴澤探真「成務帝 佐紀盾列池後陵 荒蕪」／「成務帝 佐紀盾列池後陵 成功」（外池 昇編『文久山陵図』、新人物往来社、2005 年。
- (7) 「垂仁天皇皇后陵見張所改築及び同陵渡土堤人止柵取設」書陵部陵墓課『昭和 47 年 工事録』11（宮内公文書館所蔵、識別番号：12961-11）。
- (8) 宮内庁書陵部陵墓課編『出土品展示目録 埴輪Ⅳ』、宮内庁書陵部、2003 年。
- (9) 帝室林野局『成務天皇 佐紀盾列池後陵 稱徳天皇 高野陵 皇后日葉酢媛命 狭木之寺間陵 之図』（宮内庁書陵部陵墓課編『宮内庁書陵部 陵墓地形図集成』、学生社、1999 年）。
- (10) 註（7）に同じ。
- (11) 昭和 62 年修正の陵墓地形図との比較による。
- (12) 平成 28 年 3 月 11 日に、奈文研において調査記録を閲覧し、その一部について複写物の提供を受けた。閲覧に際しては青木 敬氏のお手を煩わせた。記して感謝の意を表したい。
- 以下、奈文研調査に関する記述は、提供を受けた調査記録によるものである。
- (13) 笠野 毅「狭木之寺間陵の墳丘外形調査」『書陵部紀要』第 43 号、前掲註（4）文献。



1 電柱・支線設置箇所 全景（南から）



2 新事務所前舗装箇所 全景（南東から）



3 旧事務所撤去箇所 全景（南西から）



4 旧事務所撤去箇所 全景（北西から）



5 旧事務所撤去箇所 全景（北東から）



6 旧事務所撤去箇所 全景（南東から）



7 旧事務所撤去箇所 北壁（南から）



8 旧事務所撤去箇所 東壁（西から）



1 旧事務所撤去箇所 南壁（北西から）



2 旧事務所撤去箇所 西壁（東から）



3 旧事務所撤去箇所 小ピット列（南から）



4 旧事務所撤去箇所 東壁南東隅付近土層詳細（東から）



5 電気設備撤去箇所 第1地点 南西壁（北東から）



6 電気設備撤去箇所 第2地点 南西壁（北東から）



7 電気設備撤去箇所 第3地点 西壁（東から）



8 電気設備撤去箇所 第4地点 西壁（東から）



1 電気設備設置箇所 第5地点 北壁（南から）



2 電気設備撤去箇所 第5地点 西壁（東から）



3 旧倉庫撤去箇所 全景（南東から）



4 旧倉庫撤去箇所 全景（南西から）



5 旧倉庫撤去箇所 北壁（南西から）



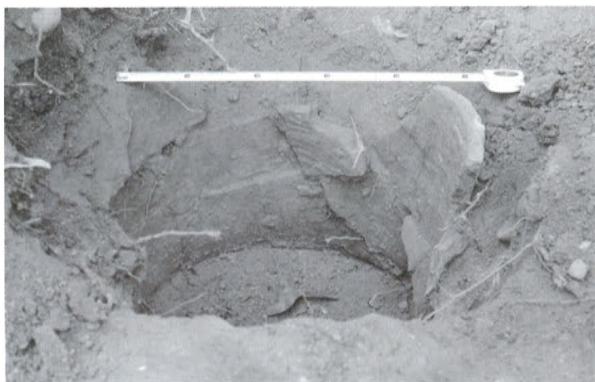
6 旧倉庫撤去箇所 東壁（北西から）



7 旧倉庫撤去箇所 南壁（北東から）



8 旧倉庫撤去箇所 北壁（南東から）



1 昭和 46 年度 基礎箇所調査
埴輪 A 出土状況 (西から)



2 昭和 46 年度 基礎箇所調査 埴輪 A



3 昭和 46 年度 奈文研調査
小ピット列 (西から) (撮影：宮内庁)



4 昭和 46 年度 奈文研調査
南拡張区 (北東から) (撮影：宮内庁)



5 昭和 46 年度 浄化槽箇所調査
東西トレンチ遺物出土状況 (東から)



6 昭和 46 年度 浄化槽設置箇所調査
埴輪 E 出土状況 (北から)